



今月の農家さん

感謝とともにある農業

野洲市八夫

北脇 真吾さん (42才)

真優ちゃん (7才)



野洲市で農業を始めて12年目の北脇さん。およそ20年前、父のすすめで農業法人に勤め、農業の面白さを知ったのが、始めたきっかけだそうです。現在の作付面積は、米25ha、麦・大豆は約19haで、米の作付面積のおよそ3分の2は、安全・安心な「環境こだわり米」を作付されています。

日々、急な天候の変化に苦労しながらも、それに合わせてやっていく大変さがむしろやりがいになっているそうです。

北脇さんは「農地の集約化などで、農家が減少していくことが少しさびしいです。今農業をされている方はずっと続けてほしいですし、これから農業を始めようという方は応援したい」と話し、続けて「この仕事を理解してくれている、愛する家族はもちろん、全ての人々に日々感謝して、おいしい農産物をこれからも作っていきたいです」と、笑顔で話してくださいました。

今年7月からは、新たに「小豆」の作付にも挑戦。年末まで忙しい日々が続きます。

宮農情報

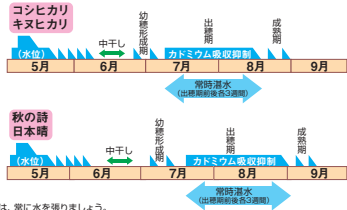


カドミウム吸収抑制対策について

カドミウムは人体に有害な重金属で、農作物は根を通じて土壤中から吸収します。日本では「食品衛生法」により、米に含まれるカドミウムの基準値は0.4ppm以下となっています。基準値を超えるカドミウムを含む米は、食用としての販売等の流通が禁止されるとともに、生産者等による回収・廃棄などの処分が併せて必要になります。

カドミウムは自然に存在する物質で、場所により多少の差はあるものの、どこの土壌にも存在します。カドミウムは土壌中の酸素が少なくないと硫黄と結びつき、水に溶けにくくなるため、水稻に吸収されにくくなります。そのようないくつかの理由から、出穂の前後各3週間

カドミウム吸収抑制のための水管理



穂が出る前後各3週間の時期は、常に水を張りましょう。

生品種は7月20日頃から9月1日頃を目安)は、湛水管理(水深3cm程度水を張る)を行い、水稻がカドミウムを吸収しないよう努めましょう。また、この時期の湛水管理は、胴割粒や白未熟粒などの発生を少なくし、米の品質向上につながりますので、必ず実施しましょう。

また、主に中晩生品種で中干し作業が未実施や不十分な場合は、ありましたら、幼穂形成期(7月10日頃)までに、中干しを実施しましょう。中干しは品質向上に加え、土を一度固めることで、6週間の湛水管理の後の収穫時に作業を円滑に行えるようにするためにも必要です。

穂肥について

穂肥の施肥は、収量の増大や登熟の向上等、稲の生育後期には重要な作業です。穂肥の施用時期は基本的に幼穂の長さで出穂日を予想し判断します。コシヒカリ・滋賀羽二重糯がみ・キヌヒカリ・日本晴は幼穂長1mm(出穂25日前)、秋の詩は幼穂長5mm(出穂20日前)が穂肥の施用時期の目安となります。また、穂肥の施用量は葉色と株張りによって診断します。

なお、夏期農談会にて、現地確認をさせていただきますので、ぜひご参加ください。